

2019年度

鳴門教育大学ファカルティ・ディベロップメント
推進事業実施報告書

巻 頭 言

本学では、2019 年度 4 月に大学院学校教育研究科を改組し、修士課程人間教育専攻と専門職学位課程（教職大学院）高度学校教育実践専攻により構成された新しい大学院組織が発した。人間教育専攻は、「多様性の受容」が損なわれることにより生じる現代的な教育課題の解決・改善に関して、専門的な立場から取り組み、国内外の学校教育等を支援できる人材を育成することを目指している。また、高度学校教育実践専攻は、教科実践高度科系と教職実践高度化系から構成され、変化する社会の状況を踏まえ、学校教育をめぐる現代的な諸課題の解決に果敢にチャレンジする教科や教職に関する高度な専門性と教職実践力を備えた教員を養成することを目的としている。

改組の初年度にあたる今年度の FD 推進事業では、各課程において育成を目指す人材像を踏まえ、修士課程と専門職学位課程の共同で特別公開授業及び授業研究会を実施し、各専攻から 4 科目を特別公開授業として公開し、所属の教員及び外部評価者としてお招きした大学の教師教育の専門家や教育委員会関係者が参観した。

修士課程人間教育専攻からは、科目「現代人間教育論」が公開されている。本授業は、英文学と教育人間学の専門教員により、自己と他者との関係、教育と人間との関係について深く考察するために、「モダニズム」、「ポスト・モダン」、「ポスト・ポスト・モダン」の思潮と認識に様式の相違についての議論が展開されている。

専門職学位課程のうち、教科実践高度化系からは、「数理認識教育（数学）の内容構成演習 A」と「言語文化教育（国語）の学習指導と授業デザイン」の 2 科目が公開されている。「数理認識教育（数学）の内容構成演習 A」の授業は、数学科教育に係る現場の諸問題を、学問としての数学に関する知識・技能を活かして改良・発展し、授業に役立てるという流れで構成されている。また、「言語文化教育（国語）の学習指導と授業デザイン」の授業は、日本語で書かれた言語文化テキスト（文学的文章・説明的文章）を素材として、学習者の主体的・対話的な学びを保障しつつ、学習者自身が自分の解釈や認識を相対化し、深めていく国語教師としての授業力量の育成を目指す授業となっている。

教職実践高度化系からは、科目「校種間連繫に視座した教材・教具の開発演習」が公開されている。本授業は、学校教育の今日的課題である小中連携教育、中高一貫教育、中等教育学校、義務教育学校等、校種間連携を視座とした教科書教材の開発とそれに基づく学習指導案の作成及び授業の構想をまとめ議論する展開になっている。

FD としての公開授業では、各課程・専攻において育成を目指す人材像とその人材に求められる専門的知識や能力、態度を明確に捉え、それらと結んで授業の目的、内容、方法及び評価等について一貫性がみられたかどうかを、授業者・参観者が共通の観点としながら活発に意見交換をし、共に改善点を見い出していく中で、教員養成に直接・間接に携わる大学教員が自らの専門観、教育観と授業力量を磨いていくことが求められる。本 FD を通して、教育の質を担保し、学生に学修成果を保証するために、具体的な授業実践のレベルで不断に検証し、教育の改善に努めていこうとする本学の教育に対する姿勢を確認したい。

(FD 推進委員会 副委員長 梅津正美)

2019年度鳴門教育大学FD推進事業 実施要項

1 目的・意義

本学は、2019年4月から大学院学校教育研究科の改組を行い、新しい大学院教育を展開してきている。修士課程人間教育専攻は、心理臨床コース、現代教育課題総合コース、グローバル教育コースから構成されるが、本専攻の3コースをつなぐより系は、「多様性の受容」が損なわれることにより生じる現代的な教育課題の解決に立ち向かう人材の育成にある。また、専門職学位課程（教職大学院）高度学校教育実践専攻は、教科実践高度化系と教職実践高度化系の2専攻で構成され、変化する社会の状況をふまえ、学校教育をめぐる現代的な諸課題の解決に果敢にチャレンジする専門性と実践力を備えた教員を養成することを目的としている。

本学の学校教育研究科の両課程・専攻は、育成する人材像を明確にし、それと結びついた到達目標を定め、その達成を保証するカリキュラムを体系的に構築している。一方で、研究科を構成する大学教員は、ステークホルダーたる大学院生や教育委員会ならびに学校関係者の評価を謙虚に受け止めながら、育成する人材像と資質・能力を明確にした教育課程を協働して遂行していくことが不可欠である。そのためには、FDを通して教育の質を担保し、学生に学修成果を保証するため、具体的な授業実践レベルで不断に検証し、教育の改善に取り組んでいかねばならない。

そこで、改組の初年度にあたる2019年度のFD推進事業は、学校教育研究科を構成する修士課程と専門職学位課程の共同で特別公開授業及び授業研究会を実施する。

2 実施方法

(1) 対象者：本学全教員

(2) 実施日時：令和元年12月4日（水）13時00分～17時50分

(3) 日 程：（別紙）特別公開授業実施要項のとおり

(4) 実施要領：

- ①人間教育専攻から1科目、高度学校教育実践専攻教科系から2科目及び教職系から1科目（計4科目）の授業を特別公開授業として実施し、所属の教員及び外部からの招待者が参観する。
- ②高度学校教育実践専攻教科系においては、3コースから「内容構成演習」及び「学習指導と授業デザイン」の2科目を公開する。
- ③特別公開授業には、徳島県教育委員会関係者及び新設された「教育課程連携協議会」委員を招待する。
- ④参観者は、原則、所属する専攻、系、コースの授業研究会に参加する。
- ⑤特別公開授業担当教員の授業については、大学院教務係において、時間割の調整を行う。
- ⑥本年度のFD推進事業では、改組した教職大学院に重点化することから、学部の公開授業は実施しない。

(5) 特別公開授業の実施時限（3限）に通常開講する授業の取扱い

下記授業は、通常通り実施する。授業担当教員は、4限の授業研究会に参加いただく。

【大学院（修士課程）・3限】

- アカデミックライティングⅡ（鎌田先生）
- 歴史学演習Ⅱ（町田先生）
- 地学実験法特論（村田先生）
- 教科内容構成（教育と科学技術）（当日担当教員）

【学部・3限】

- 英語オーラルコミュニケーション（マーシェソ先生）
- 外国史特論（原田先生）
- 化学Ⅰ（当日担当教員）

2019年度鳴門教育大学FD推進事業 特別公開授業実施要項

1 実施方法

- ①人間教育専攻から1科目，高度学校教育実践専攻教科系から2科目及び教職系から1科目（計4科目）の授業を特別公開授業として実施し，所属の教員及び外部からの招待者が参観する。
- ②高度学校教育実践専攻教科系においては，3コースから「内容構成演習」及び「学習指導と授業デザイン」の2科目を公開する。
- ③特別公開授業には，徳島県教育委員会関係者及び新設された「教育課程連携協議会」委員を招待する。
- ④特別公開授業に係る授業研究会は，特別公開授業終了後に実施し，原則，所属する専攻，系，コースの授業研究会に参加する。
- ⑤特別公開授業担当教員の授業については，大学院教務係において，時間割の調整を行う。
- ⑥本年度のFD推進事業では，改組した教職大学院に重点化することから，学部の公開授業は実施しない。

2 対象者 本学全教員及び招待者

3 日時 令和元年12月4日（水）13時00分～17時50分

4 特別公開授業について

時間	専攻等		授業名	担当教員	教室等
3限 (13:00～14:30)	人間教育専攻		現代教育人間論	太田 直也	B103
				谷村 千絵	
	高度学校教育実践専攻	教科実践高度化系	言語文化教育(国語)の学習指導と授業デザイン	幾田 伸司	B207
				小島 明子	
		教科実践高度化系	数理認識教育(数学)の内容構成演習	松岡 隆	B206
				成川 公昭	
秋田 美代					
4限 (14:40～16:10)	教職実践高度化系	校種間連携に視座した教材・教具の開発演習	金児 正史	B208	
			泰山 裕		
			西村 公孝		

5 特別公開授業に係る授業研究会について

時間	専攻等		授業名	司会者	教室等
4限 (14:40～16:10)	人間教育専攻		現代教育人間論	金野 誠志	B103
	高度学校教育実践専攻	教科実践高度化系	言語文化教育(国語)の学習指導と授業デザイン	山田 芳明	B207
			数理認識教育(数学)の内容構成演習		
5限 (16:20～17:50)	教職実践高度化系		校種間連携に視座した教材・教具の開発演習	大谷 博俊	B208

2019年度鳴門教育大学 FD 推進事業 特別公開授業・授業研究会実施報告書

＜人間教育専攻＞

1 特別公開授業名 「現代教育人間論」

2 授業日（曜日） 12月4日（水）3限

教室 B103

担当教員名 太田直也 谷村千絵

受講者数 14人

参観者数 6人

3 授業概要

【授業の目的及び主旨】

人間と教育に関連する個別のテーマを設け、主に文学と教育人類学の分野から、場合によっては科学哲学や教育実践学の知見をも引きながら、議論の糸口となるような諸考察を提示する。

【到達目標】

人間と教育に関して、必ずしも「学校」という枠を設けず、今日の人間と教育に関連する諸領域の知見に照らし、広く深く展開される諸考察を学び、人間と教育に関する議論の多様性と可能性を理解する。

【授業内容の概要】

現代教育人間論は、教育と人間について、担当教員の専門的知見に基づき、さまざまなアプローチを行う授業である。本時まで行ってきた授業は以下のとおりである。

○イントロダクション：モダニズム、ポスト・モダン、「ポスト・ポスト・モダン」

○毀れたプラトン：ジャック・デリダによる脱構築

○不確定性・非合理性・世界：モダニズムからポスト・モダンへ

○自己・アイデンティティ・他者：シャミッソー『影をなくした男』とシェリー『フランケンシュタイン』

○私のありよう：有吉佐和子『華岡青州の妻』

○メロドラマ仕立ての世界を読む「私」：村上春樹「緑色の獣」にみる他者

モダニズム、ポスト・モダン、「ポスト・ポスト・モダン」は、それぞれ主体と客体を認識の様式が違い、それが三者を分けるひとつの要素であると思われる。他者が厳然として存在することを前提とする「科学至上主義的モダニズム」、「そのもの」の自己存在を自己に内包させて「他者」の産物とし、他者は存在しないとするポスト・モダン、自己と「他者」と他者を和解させようとする新モダニズム(あるいは似非ポスト・モダン)、モダニズムとポスト・モダンを超越しようとする「ポスト・ポスト・モダン」の違いである。

いうまでもなく、新しいものが正しいわけではない。本授業前半では、上は3つの考え方、もしくは他者に関する考え方の歴史的変遷を確認し、「ポスト・ポスト・モダン」に加わるであろう第三項理論などを参考にし、1)読みの可能性、2)他者としての物語のありよう、3)物語と生、4)人間にとっての言語の役割、について少しく考えていきたいと考えた。

通常、授業の終りに15分程度時間を設けて、受講生に「ノートのノート」と呼ぶコメント票への記入、提出を求めている。「ノートのノート」は、通常の授業進行の参考にするほか、12月と2月に、それぞれ中間総括、総括の時間を設け、一人ひとりが読み返すとともに、授業の感想や疑問をシェアすることになっている。

今回、FDの対象となった授業は、中間総括にあたる時間であり、授業者の進行のもと、10月から11月までの講義の振り返りと、「ノートのノート」を読み返して、車座になって、授業への感想等を全員が発表した。授業担当教員の全員が出席し、適宜、コメントした。

4 授業研究会要録

「多様性の受容」が損なわれることにより生じる現代的な教育課題の解決に立ち向かう人材の育成を重視する本学の大学院教育を念頭に協議を行った。

<内容的側面から>

- ◆今までの授業で出てきた思想と、自分自身の考えを照らして院生からは多様な意見が出てきた。
 - ・他を受け入れないと白黒もはっきりしようがない。
 - ・本当は他者は存在しなくて自分の脳内にいる仮想的な他者の意識が強い。周りからの評価を常に気にする自分のことが当てはまる。
 - ・私がいて私が作った他者を感じる。教師－子ども、子ども同士、教師同士など、規律枠の構築を実感する。
 - ・二項対立を壊そうとグレーの部分を設定すると、今考えていること自体が崩れてしまう怖さがある。二項対立は扱いやすい。
- ◆それぞれの院生が、自らの経験と授業の内容を結び付け、自分と他者との関係性やその在り方についてそれなりに考えることができていた。
- ◆自然科学でも、人文科学でも、例えば論文を書く場合は白黒付けていくほかない場合が多いが、数値で表せず評価基準が明確ではないものも現在は多様にある。二分法では解決できない問題も重視していく必要がある。
- ◆文学は、二分法では面白くない。

<方法的側面から>

- ◆「哲学対話」のように車座になって、その中に教員も一緒に入り、院生の考えをそれぞれシェアリングしていく方法によって、抵抗なく院生の考えを引き出すことができていた。

- ◆教員も、院生の中に入って、対話のコーディネーター的役割をになったことは、今日の授業の性質上非常によかったと思われる。ただし、2人の教員が並んでの着座や院生の考えをメモしたことは院生にとって圧力となったかもしれず反省している。
- ◆院生が自らの振り返りに使っていた「ノートofノート」(授業における自分の考え記録)は、此れ迄の学修を院生自ら振り返る手立てとして有効に機能していた。他に取り入れている教員もおおり、その効果を共有できた。
- ◆台湾の留学生、中国の留学生、人文系の院生、自然系の院生、現職教員、ストレートマスターと多様な院生が会しての授業であったが、その多様性が生きた手法であった。
- ◆留学生はそれぞれの国の教育に於いて正しいとされることを学んでいる場合もあるので、その想定を予めしておくことも大切だということが共有できた。

2019年度鳴門教育大学 FD 推進事業 特別公開授業・授業研究会実施報告書
＜高度学校教育実践専攻 教科実践高度化系＞

1 特別公開授業名

「言語文化教育（国語）の学習指導と授業デザイン」
「数理認識教育（数学）の内容構成演習」

2 授業日（曜日）・教室・担当教員名・受講者数・参観者数

令和元年12月4日（水）3限（同時に2授業実施のため他項目は下に夫々記す）

「言語文化教育（国語）の学習指導と授業デザイン」（B207）

幾田 伸司・小島 明子

受講者数： 11名

参観者数： 37名

「数理認識教育（数学）の内容構成演習」（B206）

松岡 隆・成川 公昭・秋田 美代

受講者数： 4名

参観者数： 26名

3 授業概要

○「言語文化教育（国語）の学習指導と授業デザイン」

【授業の目的及び主旨】

本授業では、日本語で書かれた言語文化テキスト（文学的文章・説明的文章）を素材として、学習者の主体的・対話的な学びを保障しつつ、学習者自身が自分の解釈や認識を相対化し、深めていく授業を構想し、実践する授業力の伸長を図ることを目標とする。学習者が対話的に解釈や認識を深めることを企図した学習指導を構想し、模擬授業を行うとともに、実践した授業を受講者相互で省察することを通して、学習者の認識の深まりを図る言語文化教育のあり方を考究する。

【到達目標】

- ① 言語文化テキストを対象とした、学習者の解釈や認識の深化・変容を図る授業を構想し、実践することができる。
- ② 学習者の解釈や認識の深化・変容という視座から、構想・実践した授業を批評することができる。

【本時（第2回）の概要】

・目標：「形」（菊池寛，中3）を素材として、第一場面の学習課題を設定する。



特別公開授業風景（国語科）

本時では、テキストに対する問いを起点とした教材分析を行い、グループごとに「形」第一場面の学習課題を考える。

○「数理認識教育（数学）の内容構成演習」

各教科の内容構成演習の主旨

「諸学問を基盤とした専門的な知識・技能を教科内容として構成し、学校の授業に役立てる手立てを学ぶ。」

次の2つの方向性が考えられる。

- ・学問から出発する。
諸学問を基盤とした専門的な知識・技能をいくつか選び、それらを教科内容として構成する。
即ち、学問を生かして、新しい教科内容を構成したり、既にある教科内容の改善を行う。
- ・教科内容から出発する。
教科内容をいくつか選び、諸学問を基盤とした専門的な知識・技能を用いて改良・発展させる。

数学の内容構成演習の主旨（授業の流れ）

少ない授業時間の中で、学校の授業にすぐ役立つ手立てが学べるようにするため、後者の方向性をとる。具体的には、次の順に授業を進める。

- ① まず、理解が不十分になりがちで指導の難しい教科内容を選ぶ。
- ② 選んだ内容の理解を難しくしている要素や側面を焦点化・明確化する。この作業は、内容の本質・意味や見方・考え方に関する授業者からの助言を得て行う。
- ③ 内容の本質・意味や見方・考え方の理解を元に、教科書等での扱い方や構成について考察する。
- ④ 考察を生かした授業の展開を考え、模擬授業を行う。

（具体的には、チェバ・メラネウスの定理・円周角の定理・回転体の理解・円2つの中心点と円周の交点一つで成る二等辺三角形のイメージ理解・扇形の面積算出、がピックアップされた）

内容構成演習A,Bの分担

内容構成演習A 代数、幾何の内容
（量と形を起源とする数学の内容）
内容構成演習B 解析、確率・統計の内容
（変化を起源とする数学の内容、数学と現実世界との繋がりの一側面）



特別公開授業風景（数学科）

4 授業研究会記録

実施日時：令和元年12月4日（水）14：40～16：10

司会：山田芳明（美術科教育実践分野所属），

書記：内藤隆（美術科教育実践分野所属）

(司会)

各授業者が前方に座り、参観者から質問を受ける形としたい。
他の授業(教材開発演習・授業デザイン)との関連についても触れていただく。
教科教育と教科専門の協働についても是非触れて欲しいと専攻長から依頼もあった。
まずは、カリキュラムの構成意図・主旨・本時の内容の順で紹介を願う。

(松岡)

「数理認識教育(数学)の内容構成演習A」について。内容構成演習の主旨をまず確認し、教科の内容から出発していることを説明した。現場の諸問題を、学問に関する知識・技能を活かして改良・発展し、授業に役立てるという流れを確認した。我々は数学から出発すると行き先が不明となるため、授業に役立てることを重視し逆進して考えた。指導の難しい問題を選んでもらい、その困難な点の要素を明確化する。そして、教科書等での扱い方を考察し、授業に活かす形とする事にした。Aは幾何・代数をテーマとし、これに対しBは解析・確率統計をテーマとする。今回はチェバ・メラネウスの定理、円周角の定理、回転体の理解、円2つからの二等辺三角形のイメージ理解、扇形の面積算出が出されたが、回転体と二等辺三角形の問題はその場で解決し、テーマが扇形の面積算出に絞られた。解決法、イメージ、概念、の3つの理解に難点があった。

(司会)

全体のカリキュラム構成は? 教科専門と教科教育のバランスは?

(佐伯)

現在は授業デザイン・教材開発・内容構成それぞれに専門と教育の教員が入っている。オムニバスでしておりリードは誰かがしているが、いずれも複数教員が入り、調整しながら進めている。リードする教員の専門性を活かすように進めており、自分の場合、技術的な面が出るが、表現の方向でも貢献するように進めている。



授業研究会風景

(秋田)

教材自体が持っている指導内容としての可能性を引き出すように進めている。自分は授業デザインでは、子どもが内容をどのように認知すれば理解が進むかを考えながら作っていける事をモットーとしている。

(司会)

あまり夫々の授業を明確に分けずに進めているということか。

(佐伯)

皆さんそうだと思うが、全ての局面でお互いが関与すべき部分が出てくる。

(司会)

「言語文化教育(国語)の学習指導と授業デザイン」について説明をお願いしたい。

(幾田)

「言語文化教育（国語）の学習指導と授業デザイン」について。カリキュラムについて。本日の授業は授業デザインで主として幾田が担当しており、内容構成演習は小島先生が担当している。

（小島）

内容構成演習について。村井先生とのTTで、文学教材、特に古典文学で進めている。古典の中でも、自分が「名文である」というものを受講者各自に選ばせ、発表させている。並行して村井先生から音読指導等をしていただき、小島は解釈などの読み方を指導した。

（余郷）

教材開発演習は、今年は1教員が育休を取ったため、私が単独で担当している。

（幾田）

本日は原文が古典で小説になっているものを題材とした。基本的にはグループワークを取り入れている。授業づくりの力を育てたいと考え、マイクロティーチングも取り入れる予定にしている。本日はPISA調査の結果をテーマにしたディスカッションも入れた。読解力の問題は今に始まった事ではなく、従来からあったものだ。若干抽象的だったかもしれないが、現状を考えるヒントとしたかった。授業に際しては、以下の点を意図した。

- ・グループワークでは課題（何を書けば良いか）を目に見える形にすべき。
- ・教材を読み切るためにも、具体的な問いを想定して「発問を一つに絞る」ことを指示した。
- ・現職がリードしながら、ストレートの考えを拾ってもらい浮き上がらせるようにした。

（司会）

数学科の構成演習Aの今後は模擬授業で終了か？

（松岡）

受講者のそれぞれが課題を見つけて考察し、4コマ目に模擬授業に至るサイクルを2回繰り返す計画。今回は受講者数が少ないためグループに分けず各人からテーマを挙げた。

（司会）

国語は如何か。

（幾田）

今後は4時間で物語、4時間で説明的文章を扱う予定にしている。教材研究を行い、その後授業づくり、最後のコマに模擬授業に至る計画。

（司会）

では質疑応答に移る。

（余郷）

数学の授業は見えないが、松岡先生の説明に質問。学問からのスタート自体が我々に許されていない（昨年までのように専門性から始まらない：本当の所、学問の専門性から始めるべきと考えられる）ように感じるが、如何か？

（松岡）

自分は以前の修士課程の時から「学問から」はやっていない。学校で使えそうな面白い問題をピックアップしてきた。

(司会)
常に現場から拾ったと。

(松岡)
それもあった。面白いケースがあれば拾ってきた。

(成川)
私もまずは出発点として「起こった問題(トラブル)」から出発し、その問題を内容で解決してきた。そうすると対応できる。学問から出発すると「何を小難しい事を」と言われてしまう。だから今回の変革はあまり影響無い。

(松岡)
その方が、すんなり進める事ができる。

(立岡)
国語の PISA の記事だが、設問自体(特に2問目)や記事自体も欠陥や稚拙さがある。これに対しては国語の先生方はどのようにお考えか。

(幾田)
議論のある所だと思う。PISA を見ても、実際に文章から内容の取出しはできて、その正否を吟味する事などに適応できていない。以前からも同じ事を指摘されている。これは学習の中で解決すべき問題と考える。子どもは意見を言いつばなしで検証する習慣が無い。

(立岡)
確かに同意だが、これは PISA で測れる事だろうか。

(山木)
幾田先生の授業で、資料配付された時点で自分自身に混乱があった。PISA の書評の流れから授業テーマの(菊池寛の)「形」へ移ると、受講生が推測を前提に分析を進めていたように見えた。事実と意見、文章の違いによってリテラシーのあり方が変わると思う。

(幾田)
説明的文章であれ、物語であれ、文章には、いずれにしろ筆者の考え方が投影される。本日はそれを意識して提示していなかったが、原文と比べることで、菊池寛の文章構成が浮き上がるのはいかとう期待はあった。推測については「(「形」の)主人公は、本当に力が落ちてしまっていたの



授業研究会風景

か」という問いを示したグループもあったが、学生達が自分でそれに気づいて欲しかったため、全体には触れなかった。各自の省察力を掘り起こしたい。

(山木)

多様な形の文章において、事実と意見を選り分けるだけでない、重要な事を拾い出せるようなものがあるように思う。より良き読み手になるためにどのような方策をなされているか。

(幾田)

推論的能力は育てたい。

(木原)

自分も授業デザインを担当だが、たった2コマである。自分にとっては与えるべきものが多く、学生に討論させる時間が取りづらい。議論の時間を多く取る手法にはどう思うか。

(幾田)

「手順」については受講生に最初に示している。伝えなかった事はノウハウとして昨日の授業で示してしまっている。

(木原)

「形」は授業時間でどの程度かけるか。

(幾田)

3・4時間。

(木原)

原典と「形」の主旨が違っているのではないか。変わっている部分を発見させられないか。

(幾田)

そのためにも、「原典との比べ読み」が大切だろうと思う。

(小島)

3時間目あたりでこの差異に触れるのも良いかと思う。まずは「形」という作品を吟味した方が良い。味わう順番を大切にすべきである。

(島山)

国語の方で、現職教員が受講生にいる事が（この授業形式成立の）原則だが、社会科ではストレートが殆どになる。また現職院生でも経歴が授業内容の専門に触れていないケースもある。PISAについては他にも色々用意して示すべきだと社会科では考えるので、国語科とも連携もできるかもしれない。本日「考える力」という言葉が出たが、これは疑問が残った。

(松岡)

数学では従来は殆どストレートだったが、今年は現職が半数いて都合が良かった。意味や見方・考え方に触れられる。

(成川)

学部では線形代・数微積分を教えるが、使ってみて初めてその意味が分かる。習うだけだと身に付かない。学卒院生は身に付いてない事が多いが、使用を意識した再教育をできているように思う。

(幾田)

「考える力」はわざと使った。「考える力」が幅広い意味を持つ言葉だということは承知しているが、時間がないこともあり、大雑把だが提示する形とした。また、本日は急遽新聞も取り入れて使ってみたので、受講者に見せる資料作成が間に合わなかった。

(村井)

自分の担当する別の授業でも徳島新聞版の PISA 記事を使用した。こちらは教科横断授業で求めている「問題発見力」を触発するため。受講生は順位に目が行っていたが、新聞裏面の論理的文章指導の記事に触れた。論理的文章と情緒的文章があるが、(記事を書いた)新井氏は文章を感覚的に読む事を否定していたが、本当の批判力とするにはまず感覚で気づく必要がある。

(司会)

教科専門と教科教育の協働とその手応えについて意見を頂きたい。

(松岡)

私は3種類の授業全てに関わるが大変楽しい。数学の見方・考え方が役立っている。

(佐伯)

数学ではノープランでやっている。学生の意見も引き出しながらできている。私も楽しい。

(幾田)

原典と比べてみたり、読み方を見てみたりするときには、教科専門の知見が不可欠。見方・考え方は学習内容に一致する。文学的研究方法を学習内容にできると思う。

(小島)

一緒にやる事で学ぶ事が多い。現カリキュラムの問題点は、十分な時間をかけられないこと。古典を読むリテラシーについて時間をかけて習得しなければならない。4月から課外で「古典文学を読む会」を組織しているが、できれば授業でやりたい。

(司会)

専門性を担保する点ではどう考える？

(成川)

使えない専門性は「身に付いていない」し、実際使えない。何かを入り口にして使える専門性をできるだけ深めてもらいたい。

(佐伯)

学問を広めるのではなく、解けるだけではない「深さ」を感じ取れるようになって欲しい。

(成川)

時間が少ないし、学生は忙しい。一つの事で経験に触れれば、それを切っ掛けに本人が自ら広げられるのではないかと考える。数は少なくても、小さくても、切っ掛けを与える事。ただし、昨年までの修士の課題研究にあたる部分の削減はもどかしい。

(司会)

時間が少ないが残りの質問を。

(藤田)

時間割の編成で問題がある。昼休みを挟み2・3限に跨がる授業があると宿題が出せない。

(司会)

来年度前期の授業では、教務で半期通年に均す計画がある。ただし、全ての授業に対応するものではない。

(佐伯)

授業者の裁量で飛び出た時間を他へ移せるようにすれば良いのでは。

(幾田)

カリキュラム上移動できないものがある。先生方の裁量や、集中講義期間で対応していただけると嬉しい。ただし、教務課として明言はできない。

(司会)

どうしたら教科専門の先生方がその力を発揮し、学生にそれが伝わるようにできるかをここ数年間で探らなければならない。また今後継続的に議論できればと考える。本日の授業研究会はこれで終わりとしたい。

<以上>

2019年度鳴門教育大学 FD 推進事業 特別公開授業・授業研究会実施報告書

< 高度学校教育実践専攻 教職実践高度化系 >

1 特別公開授業名 「校種間連携に視座した教材・教具の開発演習」

2 授業日（曜日） 1 2月4日（水）3限
教室 B208
担当教員名 金児正史 泰山裕 西村公孝
受講者数 12人
参観者数 16人

3 授業概要

【授業の目的・ねらい】

教材・教具が我が国の教育で有効に活用され、どのような工夫をされてきたか知るとともに、他校種他教科の教科科目について学習指導要領及び教科書を利用しながら、小中連携教育、中高一貫教育、中等教育学校、義務教育学校などの教育政策動向を踏まえ、校種間連携を視座とした教科書教材の開発、学習指導案の作成、作成した学習指導案に沿った授業実践の構想をまとめる。

【本時の目標】

校種間連携に視座した教材・教具の開発演習として第7回の続きを行う。発表者は開発教科書教材について連携の視座や開発の視点、活用（学習指導案への応用、模擬実践など）を明確にして発表する。他の受講生は開発教材について質問、感想、意見を述べることにより質疑に積極的に参加する。

【授業内容の概要】

・受講生2名による校種間連携に視座して開発した教材についてのプレゼン発表が行われた。まずは、小学校1年生から6年生まで、中学校1年生から3年生までの学習指導要領や教科書について、「学習の系統性の重視 螺旋的反復的に繰り返しながら学習する」といった観点から分析が行われた。その後、小学校6年生と中学校1年生が連携した「まどみちお」の教材についての授業提案が行われた。群読のねらいについての質問がなされた。

・受講生2名による小学校6年生の国語科教材についての、プレゼン発表が行われた。まず、教材を解釈する際に、主題を子どもが理解するための、前提知識としての鍵（見方・考え方）について説明がなされた。次に国語科教材「りんご」の模擬授業形式を取り入れながら、授業展開が説明された。発表者は子どもが作者の言葉の意図を探り解き明かす喜び、主題を読み取る喜びを、授業構成の柱としていることが説明された。さらに中学校の国語科教材「道程」についても説明が行われた。授業については、小学校6年生の鍵を引きついで展開することが述べられた。

- ・受講生2名によって算数・数学の教材についてのプレゼンが行われた。まず、小学校・中学校における算数・数学教育の課題についてと、学習指導要領や教科書についての接続の視点からの分析が説明された。次に教材づくりとして、「比例・反比例について」が取り上げられた。小学校4年生の「変わり方」の授業展開についての説明があった。続いて、中学校の関数について説明された。小学校の内容を意識した新たな授業展開が提案された。
- ・第7回授業において実施された社会科、保健体育科、英語科の教材についての発表が追加で行われた。



4 授業研究会要録

最初に、授業者である西村先生から授業についての本日の説明があった。この授業は教職大学院が開設されたときから実施している授業である。カリキュラム変更に伴い、単位数が変わったため、形式を変えて行っている。授業は現職教員と学卒院生が受講している。本年度は6コマを10月に実施し、学卒の実習終了後に2コマ実施することになった。教材を開発するだけでなく、模擬授業等を実施することも必要と考えているが、受講生の人数の関係もあり、難しい側面もある。演習において、受講生に課題を開発させるためには、知識技能のバージョンアップを目指す思考力・判断力・表現力を使えるような教材になるのか、見方・考え方とは何かといった、受講生が課題に取り組むための視点を明確にする必要があると考えている。また、授業者としては、学卒院生と現職教員院生の両者にとってふさわしい内容とは何か、といった課題を感じている。また、この授業内容を1単位で行うことの難しさも感じている、とのコメントがなされた。

続いて、授業者である金児先生からは、以下のような説明がなされた。校種間連携の視点をもって受講生が学習指導要領を丁寧に読むという基礎的事項を踏まえなければならない状況に対応するという意義はあると考えている。また前期のカリキュラム・マネジメントの授業とのつながりも見ることができた点は良かったと考えている、とのことである。

司会の太谷先生からは以下の5点について授業者の視点が整理された。

- ・授業計画について
- ・課題設定の条件の明確化

- ・現職教員院生と学卒院生という、知識経験の違いにどのように配慮し授業構成するか
- ・授業の到達点をどこに設定するのか
- ・他の授業科目との関連について

その後、授業研究会に参加された先生方から様々な質問や意見が出されて、活発な討議が行われた。

- ・発表する受講生のペアの決め方について
- ・学卒院生に対する配慮について

さまざまな校種、教科、現職、学卒院生がいる中で、良かった点と困難だった点と、評価について：授業担当者の専門とする教科とのフィットの問題もある。評価については、少ない人数の院生が積極的に取り組むことができるように授業をしており、個々の院生の理解度についての評価も丁寧にできている。

・評価については測定の精度よりも、学生の学びや授業自体を改善していけるような評価を実施する方向が大切であると考えている。しかし、評価の対象になる提出物は必要である。また、評価は、到達目標や授業計画の長さ・カリキュラムマップとの兼ね合いもある。

- ・授業担当者からは8コマの授業を3人の教員で担当する難しさについて語られた。



おわりに

理事副学長（教育・研究担当）大石雅章

教員養成大学として社会のニーズに応えるために、授業改善に努め教育の高度化を図らなければならない。FD推進事業はその中核的活動であり、学長のもとにFD推進委員会を設置し、全学的規模で毎年実施している。このFD推進事業は、個々の授業改善のみならず、本学のカリキュラム体系を検証する上でも重要な役割を担っている。

本学は、本年度全国の教員養成系大学に先駆けて、教職大学院の重点化を行い、修士課程の教科系教育、特別支援教育、幼児教育の組織を専門職課程（教職大学院）に移し、その結果専門職課程（教職大学院）は定員180名となり、修士課程は心理臨床教育、グローバル教育、現代教育課題総合からなる新たな120名定員の組織に変わった。この大学院の改組を受けて、本年度のFD推進事業は、修士課程・専門職課程（教職大学院）の授業を対象に実施した。

特別公開授業は、これまでの教職大学院の実施形態を踏襲して各県教育委員会関係者、さらに教職大学院教育に精通する他大学の教員にも加わっていただいた。本学の教員だけでなく外部の先生方に参加していただくことにより、さらに充実したFD推進事業になったといえよう。

修士課程・専門職課程の4特別公開授業、その後の授業研究会も活発におこなわれ、有意義なものとなった。本年度から開始した専門職課程の教科系教育の授業においても、教科専門・教科教育の複数教員の協働による実践的な授業として評価を得た。そこには、修士課程においてすでに実施してきた教科専門・教科教育の複数教員による授業の経験が活かされた。

このFD推進事業で得たものをそれぞれの教員が活用し、授業の改善に努めていただければと思う。最後に、この事業にご協力いただいた方々に感謝申し上げます。